



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	パネルディスカッション：学問的コミュニケーションと学問のあいだ
Author(s)	宮本，道人；池尻，良平；伊藤，賀一 他
Citation	科学技術コミュニケーション，35，83-95
Issue Date	2024-09
DOI	https://doi.org/10.14943/111796
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93239
Type	departmental bulletin paper
File Information	jjsc35_10_panel_discussion.pdf



パネルディスカッション ～学問的コミュニケーションと学問のあいだ～

宮本 道人¹, 池尻 良平², 伊藤 賀一³, 岡田 真弓⁴

Panel Discussion : Between academic communication and academic study

MIYAMOTO Dohjin¹, IKEJIRI Ryohei², ITOU Gaichi³, OKADA Mayumi⁴

キーワード：歴史コミュニケーション

Keywords: Historical Communications

1. 歴史研究，歴史コミュニケーションとは



図1 パネルディスカッションの様子

司会（宮本）では、さっそく1個目の質問です。こちらは、受講生の方から質問を募集したりして、そこを踏まえて作っています。直接的な質問にはなっていなかったりするのですが、まず1個目。パネルとして話していきたいと思うのは、「歴史研究の人って、何してる？」という、「歴史コミュニケーション分野との関係は？」みたいなことを、少し考えていきたいと思います。

では、池尻さん良いですか。

池尻 そうですね。僕、歴史学科出身なので、歴史研究、すごくトラディショナルというか、伝統的な方法としては、まず資料を発掘する。結構、西洋史学の人だったら、「海外に行って教会の中の眠っている資料を明らかにしてきた。この時期に日本と交流があった」みたいな資料を発

2024年 8月27日受納 2024年 8月29日受理

所 属：1. 北海道大学CoSTEP

2. 東京大学大学院情報学環

3. スタディサプリ

4. 北海道大学アイヌ共生推進本部／国際広報メディア・観光学院

連絡先：miyamotoneuro@gmail.com

掘して、資料を正しく解釈して、それを叙述する。レキシーカーで、真ん中の記述するみたいなやつですね。それが伝統的な歴史研究のスタイルかなとは思いますが。そういう人たちは、公民館で歴史を皆さんに伝えたりだとか、テレビ番組の監修をしたりだとか、ゲームの監修をしたりだとか、結構、自分と一般市民みたいな形で伝達するというのが昔の歴史コミュニケーションだったのかなと思いますが、続きは岡田先生にお聞きした方が良いかなと思いますが、最近では、結構、やはり変わってきているので、変わってきた歴史研究とか、歴史コミュニケーションの話はお譲り……お話いただければと思います。

岡田 一般的な考古学は、出土した遺物や遺構等の分析を通じて歴史構築をすることですけれども、パブリック考古学の教育的または広報的アプローチは、展示解説、講演会、ハンズオンプログラム、あるいはテレビ番組といった媒体を通じて直接的に歴史コミュニケーションを実践していると言えるかもしれません。

司会（宮本） ありがとうございます。

いまのお話をお聞きしながら思ったのは、やはり歴史研究というところを、どう捉えるか。広くも捉えられるし、狭くも捉えられるなと思って、歴史コミュニケーション研究というものも、たぶん広い意味では歴史研究の中に入るし、あるいはもっと大きい概念として歴史コミュニケーションがあるよという捉え方もあるのかなと思って、サイエンスコミュニケーションも、「サイエンス」と言った時、どこまで、人文科学も含むのかとか、どういうふうな捉え方をするかで、結構、大きさが伸び縮みするものだと思うのですが、同じように、そういう幅があるものかなと思います。

賀一さんは、どうですか。歴史コミュニケーション分野と、いまのお話を聞きながら、歴史研究と、どういう違いがあるのかなとか。

伊藤 自分は学部だけしか出ていないのですが、一応、史学科を出てはいますし、サークルが考古学研究会だったから発掘も 50 回ぐらいは行っています。日本ばかりですけどね。法政大の史学科は全世界必修なので西洋史をちょっとかじって、東洋史ちょっとかじって、日本史をメインにしているのですが、僕、やはり先ほどの学歴社会の話で言うと、研究者の方というのは、院に行かれた人のイメージがすごく強い。やはり何だかんだ言って、歴史研究者ぶることは、僕の職業でもできるのですが、あまりそれをしないようにしていて、逆に言うと、歴史学で博士まで行かれました、考古学で博士まで行かれました、こういう人たちと一般の人たちをつなぐ仕事を自分がやろうぐらいのような、ポータルサイト、玄関ですよ、どうしてもスタディサプリの講師をやっていたりすると、また本を書いたりテレビに出たりすると、触れる人の数はすごく多いから、通訳というか、何か、そういう仕事をするという意識があるから、自分が歴史研究者だと思っていない。だから、できることはフィールドワークぐらいのもので、北海道だと、「この間、オホーツク管内のモヨロ貝塚に行ってきました」みたいな、何か、そういうことを常にやるようにはしています。

そうやってね、さっきも「考古学、ちょっとかじりました」的なこと言っているけれど、全部かじっておかないと喋れないんですよ、並んでるお二人のようなプロパーの方と、ということ意識していて、それが僕にとってのコミュニケーションであって、お客さんをつないだり、ここと話したりすることが、ぐらいの感じですかね。

司会 (宮本) ありがとうございます。

少しだけ続けたいのですが、岡田さんにお聞きしたいのは、民間の歴史家というのも、すごくたぶんたくさんいらっしゃいますよね。資料館とか、そういうところで働かれていたり、すごくいろいろな調査とかをされている方がいると思うのですが、どういうふうにいるいろいろな方が存在するのか、お聞きしても良いですか？

岡田 考古学も歴史学も、研究者のほかにアマチュアの方が活躍されるケースがあります。それは個人でやられている時もありますし、同好会や愛好会という形で活動をしているところもあります。まちづくりや地域への愛着づくりの際にはこうした団体の活動が核になるケースもあります。

2. キャリアについて

司会 (宮本) では、次の質問に行こうかなと思います。少し毛色を変えて、皆さんのキャリアをお聞きしたいなと思って。いまのキャリアに進んだきっかけはとか、これまでで一番の困難はとか。先ほど、賀一さんがいろいろお話されていたと思うのですが、何かもう少し、小さいころ、こういうのに触れているとか、何か、そういうのとかありますか？ 何でも良いのですが、ぜひ。

伊藤 世代的には自分、団塊ジュニアの生まれなのですが、ウルトラマンごっことか仮面ライダーごっこをやるべきところ、なぜか新選組ごっこっていう (笑)。

司会 (宮本) しぶい (笑)。

伊藤 壬生に実家があるから、その環境で。あとはディズニーを好きな人って結構いると思うのですが、京都って歴史好きからすると、テーマパークに住んでいるみたいな感じなんです。ちょっとお金払ったら、お寺、神社がいっぱいあるわけであって。その立地は、すごく大きかったですね。かといって世界史が嫌いなわけでは全然なくて。何か、それが一番大きかった。ただ、やはり陣地を拡げていきたいというのがあるから、いま、スタディサプリで僕は9科目を担当しているのです。要は、社会科の中のいろいろなもの、倫理、政治経済とか、そういうの。あと、中学の地理とかも含めてなのですが、そうやってこう……何だろう。最初、スタートするのが日本史だったというだけで、社会科は全部つながっていると思っているから、陣地を拡げて行くときに、自分の拠り所、バスケットで言うピボットと一緒にですね。軸足を決めるということにおいて、そういうのが大きかったですね。

司会 (宮本) 池尻さんは、どうですか？ 元々のきっかけ。

池尻 そうですね、実は、出身は大阪の割と田舎っぽいところの出身で (笑)。家庭も、わりと全然、教育家庭とかでも何でもなかったのですが、たまたま東大に行けて、東大の先生方とか同期とかと会って、めっちゃめっちゃ社会階層が高いのですね。僕は学費全部免除ぐらいの貧乏家庭だったのですが、何か話している内容、教育学部で話している人たちの話す内容や視点が、社会階層の下の人の方の気持ちを分かっているというのが結構あって、せっかく社会

制度のおかげで僕が研究者になれるチャンスをもたらえたので、貧乏代表として研究者やってアピールした方が良いかなというのが一つ。もう一つは、せっかく人生1回だけなので、やりたいうことをやって死のうかなみたいな形で、さっきの人類をアップデートするみたいなやつ、できたら良いなあというので、賭けてみたっという感じですね。一番の困難は、そうですね、お金が無くなるという困難性がありますし、やはり新しい事、皆さんも学際的な人が多いと思うのですが、学際的な研究内容だと、最初は分からない人が多くて、共感してもらえる人が少ないんですよね。なので、自分でいろいろなことをしたり、運動とかしていくことによって、少しずつ共感してもらって、いまだとゲームを学校でやるとかも、そんなに違和感ありませんが、その辺の最初の共感があまり高まらないというのは、結構、困難だったかなと思います。

司会（宮本） ありがとうございます。

岡田さんはどうですか？

岡田 私は、さっき伊藤賀一さんがおっしゃった、「大学・大学院はジェットコースター」「滑走路」という表現に共感しました。大学院をでたら、その先に着地点があると思ったら無い、あるいは物凄く着地面積が狭いという感覚はよくわかります。子供の頃から古代文明が好きで、古代文明という言葉聞くだけで興奮してしまうみたいな子供時代でした。もう喜び勇んで大学、大学院で考古学を勉強したものの、いざ着地しようと思ったら、着地する島が極めて狭いみたいな状況があったんですね。結局、パブリック考古学というのも、考古学の中ではかなりニッチな研究領域です。そもそも考古学関連の就職先も限られている中、パブリック考古学としての職種はないので、いわば滑走路で飛んだのは良いのだけれど、「どうしよう。でも、パラシュート、もうすぐで萎んじゃう」みたいな焦りはずっと感じながら来ました。でも、その時に、やはり伊藤さんも言っていたように1マス横を、ちょっと冒険で見てみるというのは、すごく大事なことだと私も経験を通じて感じてきて、そのおかげと、いろいろな人との出会いがあって、いま何とか着地できたという感じです。

3. 学問的コミュニケーションのコツ

司会（宮本） では、次のところ。トピックがどんどん、六つあるのですけれど、三つ目に行きますね。

「難しい題材に、どう興味を持たせる？」「学問的なコミュニケーションの場を作るコツは？」。ここら辺から、少し討論的な感じでやっていきたいかなと、皆さんいろいろな意見があって、結構、盛り上がったんですよ。昨日ね、打ち合わせとかでも話しているところだと思うので。

では、まず賀一さん、どうですか？

伊藤 僕は、もうすでにみんなが知っていたり、人気があったりするものとコラボしたり、乗っかるという形を取っています。それは、例えば、漫画とかアニメとか、もちろん当たり前というか、もう社会科なんて「漫画日本の歴史が好きで始めました。間違えて史学科に行っちゃいました」みたいな人がいっぱいいるわけですよ。「三国志が好きで、東洋史を」とか。本当は全然、めっちゃ地味なんです。史学科って、色で言うと茶色ですよ。何となく。

司会 (宮本) そんな感じなんですか? (笑)

伊藤 すごい地味。本当に、妄想ではいくらでもこれまで飛ばせただけに、高校生までの時に、だから、大学に入学して「うわっ、すごい茶色だな」という感じだったりもしたわけですけど、だから何だろうな、漫画というのはありなのですけど、僕、初期の頃の著書で、年代暗記の本を学習参考書で出す時に、当時、『けいおん!』というアニメがすごく人気あったんですよ。女子高生たちの音楽のサークルものの、それを主人公の声をやっている声優さん、第5回声優アワードグランプリ獲ったばかりのバリバリ売れっ子の声優さんに、ダメ元でお願いしてCDを本につけてもらったら、めっちゃ売れたんですよ。

また、昔流行った「カゲロウデイズ」というライトノベルがあるのですが、それとコラボして中学生の参考書を出しました。去年もマイクラ、すなわちマインクラフトとコラボして本を2冊出した。これらがまた、売れたんですよ。今月は、「突撃!カネオくん」というNHKのEテレのカネオくんとコラボして、15日に本が発売される。こういう感じで、もう何か良いんです。その飛行機に乗せちゃうとか、もうすでにみんなに広まっているものに乗っけてもらう。ただ、向こうも選ぶ権利があるから、そこ、自分が質を担保しておかないといけない。自分の、要は、レベルとか質みたいなのを担保しておかないと、向こうが断っちゃうから。その部分の努力をした上で、何か乗っければ、うまいこと行くんじゃないか、と。

だから、池尻さん、ゲーム関係やっていらっしゃるんですけど、僕もゲームに乗っけるというのはありだと思ったから、知育玩具のカルタを出したことがある。だから、日本史のカルタが55,000部も売れた。いまどきアナログすぎるのに、「あ、まだそんなので行けるんだ」みたいな。だから、いろいろなものを常に探していて、何かに乗っかろうみたいなものっていうのはあるんですけど、あとは受け取る本人の問題だから。本人がどうやって、どこまで入っていくかというだけの話であって。だから、北海道にしても別に漫画『ゴールデンカムイ』で興味を持ってもらったって良いと思うし、イギリスのゴットタレントで、とにかく明るい安村を通じて、「アイムウェアリングパンツ!」で日本人に興味を持って、いまググレば、いくらでも日本人の情報が出てくるわけだから、ああいうのは僕はありだと思ってる。ただ、あまり間違った情報を教えるようだとすごく怖いから、さっきも話に出てきたけれども、ゴールデンカムイの作者にしても編集者にしても、その人が真摯にアイヌのことを考えているか、誠実に、この作品に携わろうとしているか、その姿勢はめちゃくちゃ大事な上で、ああいう売れているものに乗っかるというのはありだと思っている。そういう感じですかね。

司会 (宮本) なるほどですね。いま、カルタの話とか出しましたが、その流れで池尻さん、ゲームを使って場を作るとか、いろいろなことをされていますけれど、どうですか。場の作り方、コツ。

池尻 そうですね。僕、高校で定時制とかも行くのであれなのですが、これも一言なのですけども、「言葉を減らすこと」です。難しい題材は、別に題材が難しいわけではなくて、言葉で語ると難しいのです。学問的なコミュニケーションの場もそうですが、やはり歴史学って、言葉で書くと難しいのですが、資料を発掘して「こうかな」と解釈して、みんなで書くと、別にそんなに難しくないのです。それを、いかに言葉を少なくして体験させるかというところが大事ななと思っていて、やってみたら学問って、誰でも実験とかしても面白いと思いますし、歴史の資料で、例えば、いまの2024年を歴史の教科書に残すみたいなプロジェクトも楽しいと

思うのです。それを、いかに言葉に頼らずに伝えきるかみたいなのがポイントだなと思って、レキシーカーも、全然、言葉では語ってもらえないのですが、高校生、いまだにあのレキシーカーだとか、さっき「エビデンス！」と出ていましたが、「エビデンス！」しか覚えていないみたいな感じで、でも、体験記憶は残っているので、それが歴史という難しい題材に対して、何か残してくれるというので、言語を減らすというのは大事なかと、個人的に思っている。

司会（宮本） そのままお聞きしたいのですが、たぶん、この1年、CoSTEPの受講生、いろいろ頑張ってきた中で、丁寧に内容をちゃんと正しく伝えたいと思うと、言葉が増えてしまうという現象、たぶん皆さん経験あると思うのですよね。僕自身も、やはりライティングする中で「これ、間違ったこと書けないな」と思うと、ついつい饒舌になってしまうという。減らす時のコツって、どこにあったりしますか。

池尻 減らす時のコツ……。確かに院生は聞いたような感じはしますが。

でも、一般的なのは、「そのゲームをやる時」と「ゲームのあとでやること」を分けるということですね。ゲーム中は、本当に体験に特化させる。レキシーカーとかも、あれをやったあとに授業でちゃんと話を調べるとか、分けるというのは、結構、大事なかと思います。

司会（宮本） なるほど。あとで学べるようにしておくというような形で。

池尻 資料はたくさんあるから読んで、みたいな感じだと。

司会（宮本） ありがとうございます。

岡田さんは、どうですか？

岡田 正に丁寧に説明しようとして、ゆっくりしゃべって、しかも説明も多くなったら、あれは最も良くないパターンだったなと（笑）。

司会（宮本） いやいや、僕が、めちゃくちゃ盛り込んでくださいというのを、いろいろ事前の打ち合わせで頼んでしまったのが（笑）。「すごい、これも話をしてほしい。話、面白いな」と思って、いっぱい盛ってしまったという。

岡田 アメリカの国立公園におけるインタープリテーションの話をしました。アメリカの国立公園で採用されているインタープリテーションの考え方や技術をまとめたフリーマン・チルデンは、6つの原則を挙げています。その中に、「子供向けのインタープリテーションは大人用をやさしくしたものではなく……」というものがあります。それを見た時に何かすごく胸に響くものがありました。特に考古学は、本格的に理解しようとする方法論や解釈においてある程度の専門知識を要する世界です。2021年に世界遺産に登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」では、基本的には上部構造が残っていない埋蔵文化財であって、複数の道内および北東北の遺跡から構成される本資産のインタープリテーションを改善するための研究が行われています。この研究にかかわる機会があった際、やはりインタープリテーションが来訪者とヘリテージのあいだにチャンネルを作ることをモットーにしているというのは大事ななと思いました。さっき池尻さんの大学時代の話がありましたけれど、様々なバックグラウンドを持っている人でも

チャンネルが持てるような工夫というのが、ある種、分かりやすさっていうところで大事なかなと思います。

司会 (宮本) なるほどですね。チャンネルが持てるような工夫、確かに、いろいろなところ、「ここだったら、自分、分かる」みたいなふうに、少しずつ親しみを持たせるみたいなところって、すごく大事だなと確かに思いますね。ありがとうございます。

4. 誤った歴史が訂正されるとき、どう世間に広める・広まるのが一般的か

司会 (宮本) では、続いて、次ですね。誤った歴史が訂正されるとき、どう世間に広める・広まるのが一般的かという。いまのお話に続いて岡田さんにお聞きできればと思うのですが、やはり難しい題材だから、間違っただというのがあったとして、誤った歴史が訂正されるとき、誤った歴史が広まるということではなくて、訂正されるという、正しいほうって、なかなか広まらないじゃないですか。サイエンスコミュニケーションでもあると思うのですが、「これって正しいな」というものが、後から書き換わっていくと違って、間違っただものを1回流布してしまうと、なかなか「あっちの知識が正しかったよね」と言っても広まらなかったりするというのはあると思います。これ、どうやって広めてるのか、あるいは広まっていくのかみたいなものって、どうですかね。

岡田 このお題をもらった時に、最初に思いかかったのは、少し前に旧石器捏造事件という、当時の事件を覚えていらっしゃる方もいるかと……。

伊藤 2000年ジャストですね。24年前ですか。

岡田 もう、そんなに前なんですな (笑)。

伊藤 これが学者さんの時系列 (笑)。時空が歪んでいるのが、院に行かれた人 (笑)。

岡田 すみません、時間が歪んでいたのです (笑)。

2000年に旧石器時代とされていた遺物等に関する捏造事件がありました。一般的に、考古学研究が「最古」で「最大」の何かを発見することは喜ばしく受け止められる傾向にあります。一連の捏造事件によって提示された学説が、当時の教科書にも反映されていたので、それが捏造されたデータに基づく記述だったことが分かると、教科書の記述から捏造と関係のあった遺跡は消えていきました。この事件の調査報告書や関連書籍が複数出ており、捏造が起きた背景や要因について検証がされていますが、たとえば教科書から記載が消える際にどこまで詳細な説明があったのかは分かりません。

司会 (宮本) ありがとうございます。

賀一さんは、実際にこういうのをしなければいけない側というか、毎年のように教科書も何か少し変わったりするし、みたいな状況かと思いますが、どういう感じで伝えたりされていますか。

伊藤 本当は、もっと声高に言わないといけないものだったりもするんですけども、どうしても仕事が増えてからじゃないと、というふうな感じになってしまっています。なので、それこそこのテレビの「Qさま」とかで、「教科書は、こう変わりました」特集に出たりとか、あとコンビニとかによく置いてある本で、「いまの教科書には、こういうことは、もう書かれていません。あなたの何とかは古いです」みたいな、仕事が増えて時に要約をまとめて出すというような程度になってしまっているのです。悩みではあるんです。あと、人間は自分が習った時のことを信じたまま大人になるので、いまでもよく「近現代なんていうのは駆け足で終わってしまって、日本の教育はなっとらん」みたいなことを言う人はいっぱいいる。正直、今は近現代ばかりやっているのですよ、学校で。近現代に偏り過ぎているぐらい、近現代をやっているのに、齟齬ができてしまってから会話にならないんですよ。というようなことを、仕事が増えてなくても本来は発信していかないといけないんだな、とは思ってはいますけれど、なかなか難しいですね。限られた時間と限られたお金。さっき池尻さんからも出ましたけれど、我々、3人ともそうなのですけど、絶対これ、歴史とかを仕事にしていると…、皆さんもこれからそうかも分からない。大学院とか行っちゃってる人。どうやって食っていくかというのと、自分がやりたいこととの間を、たまたま、いま、うまく行っているから僕らはこっちに座っているだけであって、こんなのは、ただの運かも分からないわけであって、そのマネタイズをしていくということと照らし合わせると、そんなに仕事が増えないときに、それをグワッと、いっぱいある。めっちゃくちゃ訂正しないといけない。そういうのが……。

司会（宮本） 賀一さん、やはりいろいろ分野のところを広くとっているからこそ、「歴史、こういうふうに関連しているよ」というのを直すというか、そこを伝えるというところの仕事が増えるみたいな。たぶん、歴史、「バリバリここだけは専門です」という人は、なかなか依頼しにくいみたいなふうになっているのかなとも、ちょっとお話を聞きながら思ったのですけれど、どうですか。

伊藤 専門をやっていらっしやると、良い意味で怖さが出て来るのですよ。自分の専門分野以外のところにコメントをするという怖さが出て来るわけです。自分みたいに研究者ではないという、「全時代を教える受験屋さんです」という立ち位置だと、どの時代にもコメントできるわけですよ、平気で。だから、そういう人に依頼が来る。専門家だと、やはり難しいですよ。 「そんな差し入れがましいことは、近世の何々教授に怒られちゃう」とか、考えてしまうわけですよ。それを考えないで良い位置にいるからできることであって、そういうのはあります。

司会（宮本） そのお話、すごく面白いなと思って。というのは、僕自身、博士号、物理学専攻で取って、特に当時神経科学の生物物理とかをやっていたのですけれど、そこ関連の依頼って、やはり来るのですよ。監修してくれとか。でも、なかなか直接的にそこに、「ここまで細かくやる」みたいなものって怖くてできなくて、逆に何か「これ、そういう物理学専攻の専門家がお墨付きを出したんだね」と思われると、「ちょっとフィクションで盛ってみよう」みたいなふうにしても怖いから、逆に、めっちゃモリモリ盛って、「これは、やはり嘘だろう」と分かるようにしたいというのはあって、でも、依頼している側は「すごく本当っぽくしたい」みたいな。結構、せめぎ合うのですけれど、逆に全然、自分の専門と違うところだと、すごく気楽に発言できたりするというのもあって、面白いなと思いました。

池尻さん、どうですか。

池尻 そうですね、僕は、ちょっと防止策のほうの話をしたのですが、東大のオープンキャンパスをやって高校生が来たときには、理系大好きで歴史が大嫌いな高校生がいて、「何で鎌倉時代の始まりが1185年に変わるんだ？ 良い国(1192)で良いじゃん」みたいな感じで言われて、「変わるんだったら、もう何も覚えたくない」みたいなことを言われたのです。「僕に言われても困るけど」と思ったのですけれど。

やはり、それってその生徒の歴史観が間違っていて、歴史は、もうほとんど固定的なものだという前提で見ているのですよね。でも、やはり歴史家は、資料があれば変わる可能性もあるという前提で動いているので、そもそも正しいふうになっていくというのが学問の進歩なので、科学もそうだと思いますが、その考え方を学校の時代から持たせるというのが大事なかなとは思っています。そうすると、たぶん広めるとか広まるときにも、自分もミニ歴史家であるので、なんとなく納得ができる。いまちょっと、前回、前々回のスライドのときにお話されました歴史総合とか、まさに資料を使って考えていく。めちゃめちゃ歴史資料を使う授業に変わっているのですね。たぶん、だから世代的には、もういまの世代が大人になると、訂正のときとかは、「では、何の歴史資料を参考にしたのかな」というのを、より一歩踏み込んで自分たちで解釈するようになるので、そういう教育を、一歩メタな歴史観とかを教育で入れていくのは大事なかなと思います。

司会(宮本) まさにすごく科学コミュニケーションとつながりがあるというか、同じ部分が大きいかなということが皆さん分かっていたかかなと思います。

5. 歴史を現代・未来に活かせるケースと、活かせないケース、何が違うか

司会(宮本) では、次ですね。歴史を現代・未来に活かせるケースと、活かせないケース、何が違うか。僕は冒頭、自己紹介をしたとおり、「未来のことを考えてください」とか、すごく言われるのです。その時に、どうやって地域や会社の未来ビジョンを作っていくのかとか悩むんです。例えば、「地域に根ざした何か新しい街の町の在り方を考えたいんだ。でも、これまでと違うふうにしたいよ」とか、「でも、何か地元を活かしたい」とか、いろいろなことを相談を受けて、すごく難しいなと思ったりします。こういう悩みもあるなと思って、どういうふうにすると楽しく、でも、間違っていないというか、良い歴史の活かし方とかあるし、逆にうまくいかないよという、混乱を生んでしまうみたいなパターンもあると思うのですけれど、こちら辺って、どう違うのかなというのを少し議論していきたいくて、岡田さん、いかがですかね。

岡田 身近なことでは私たちが3人は、幸運にも歴史に関わることを仕事にできているというケースもありますし、いまおっしゃったように、例えば、地域の活性化とか、あるいは観光資源として歴史を活かす取組もひろがっています。

一方で、活かせないというのは、歴史が分断をもたらすとか、いがみ合いの原因になってしまうところかと思っています。そうした際、いわゆる多様な歴史の視点ですとか、あるいは歴史実践そのものも多様であることを認める姿勢、例えば自分の考えが違ってコミュニケーションを取り続ける姿勢が肝要かと思っています。なぜ異なるの歴史像が生まれたのか、それらは共存し得えるのか、あるいは一緒に訂正し合えるのか、ということに真摯に向き合える可能性があるかどうかということが、一つ、活かせるケース・活かせないケースの分岐点かなと思います。

司会（宮本） 訂正しあえる可能性があるかどうかって、すごく良いことですね。科学も「これ絶対だ」と信じ合っていると、たぶんぶつかり合うのですけれど、「もしかしたら間違っているかもね」と思いつつも、「でも、何か正しいものを探ろうか」ぐらいのスタンスでずっと対話していくみたいなことが大事なのかなと思っているので、すごくなるほどなと思いました。

では、池尻さん、どうですか。

池尻 そうですね、僕はスライドでお話ししたように、人類が歴史を活かせるシーン・活かせないシーンの話をしたいと思うのですが、やはり大事なのは「活かしたい」と思うタイミングに歴史を合わせられるかということだと思います。高校生とかも、授業を習った瞬間は「すごく興味ある」というふうに言うのですけれど、一瞬で無くなっていくのですよね。ニュースとかを見ていても、パレスチナのニュースを見ていて「ああ、大変だな」と思うと思うけれど、CMに行くと、たぶん意識が変わるとか、後で何か歴史から学ぼうと思っても、もうその時にはアクセスも悪いし止めてしまうって、結構、あると思うのですよね。

現代で言うと、例えば、有名な話で、カメラマンって、昔、誰でもなれなかったと思うのですが、いまはスマホがあるので、撮りたいシーンがあればすぐにカメラ撮れるじゃないですか。そういうふうに「歴史を活かしたいな」というときに、パッと歴史が出るような状況であれば、よりその時の情熱のまま歴史を活かして現代とか未来のことを考えていくというのになるのではないかなと思っています。いまスマホアプリを作っているのですけれど、高校生とかやってみると、やはり多様にニュースを見ながら、その場でちょっと歴史を検索するとかいう動きになっているので、そういうタイミングとポータビリティみたいなのが、結構、重要なのかなと思います。

司会（宮本） そんな気軽にできるようになったら、すごく楽しいですね。楽しみです。スマホアプリ、ぜひ、出たら教えてください。

池尻 来年、リリース予定です。

司会（宮本） 賀一さん、どうですか。

伊藤 歴史を学ぶと、基本的には、ある悲しいことがあるとして、「それは何でそういうことになったのか」というのが、まず一つ分かる。それから、自分や自分の国に照らし合わせて、「なぜ自分自身には、日本には、その悲しいことが起きていないのか」ということも分かります。また、「何をやってしまったら同じことになってしまうのか」ということも、たぶん学べると思うのですよね。そこから最近の歴史教育だと、もう一歩踏み込んで、「このような悲しいことが起きている。自分や自国のことも考える。でも、よく考えたら、もっと他にも同じことで悲しい目に遭っている人とか困ってる人がいるんじゃないかな」というふうに気づく、ということまでが一つのパッケージとして、学びとして意識されるように歴史教育は変わってきていると思うのです。とは言っても、歴史の教育って国単位で行われたりするから、例えば、北朝鮮で教わっている歴史と、イスラエルで教わっている歴史と、日本で教わっている歴史って、全部違うわけですよね。あとは、背景に宗教的な話が入ってくると、どうしてもイスラエルがガザ地区の攻撃を止められないのって、キリスト教と違って、ユダヤ教って信者がヤハウェによって救われるという事が「確定」していないのですよね。要するに、キリスト教と違って救済が予定さ

れていないというか、だからこそ、ヤハウエの気に入るように、完全に相手を潰さないといけない、みたいな意識って、少なからずあると思うのです。キリスト教徒からしたら「止めておけ」というふうに言えるのだけれど、止めてしまったらヤハウエの意識と合わないのではないかと、ユダヤ教の人は、もしかしたら考えているかも知れない。このような宗教的な問題も背景にあたりするから、そういう国単位で習っている部分があると、どうしてもお互いが分かり合えない、バラバラってような部分が、そのようなケースが出てくるのではないかなとは思っています。

6. 歴史コミュニケーションとサイエンスコミュニケーションの違い、共通点は

司会(宮本) では、最後のまとめに入りたいのですが、最後、「歴史コミュニケーションとサイエンスコミュニケーションの違い、共通点は」というところで、すでに皆さんは共通点を発見してくださったかなと思います。タイトルとして、「たったいくつものかたり」というものをつけたように、科学っていうもの自体も、「これで正しいんだ」というわけではなくて、揺らいでいるということが大事だと思っています。いろいろな研究者が、いろいろな「かたり」をする中で、間違った「かたり」とか生み出されていくわけですね。で、「こっち側に引っ張られる」とか、いろいろな中で、「でも、これが正しいんじゃないか」というのを、みんなで何となく作っている体系立っているものというのがサイエンスで、それをどう伝えるかというところが、いろいろなポイントになってくるという。僕は、特に未来のことを考えたりするというのが職業なので、「未来のことを考えるというときに、いろいろな可能性があるよね、いまの社会に、いろいろな可能性が横にも存在するし、先にも存在するし、というところをみんなで議論する軸として科学技術みたいなものがあるとコミュニケーションができるよね」というスタイルで、普段、サイエンスコミュニケーションを捉えているのです。

「では、歴史コミュニケーションって、何なんじゃい」というところなのですが、サイエンスと歴史って並べていると、全然違うものと、二つ独立しているように見えるのだけれど、そういうことではなくて、これ、「歴史コミュニケーション」という中に「サイエンスコミュニケーション」が入る場合もあると思うのですよ。何でって、サイエンスも歴史の一部だから。そういう包含関係もあるし、逆パターンで「サイエンスコミュニケーション」という広い中に「歴史コミュニケーション」というのが入る。そっちの中に入ってしまうというパターンもあると思います。なぜかと言ったら、人文科学として、歴史という科学も科学の中の一部だから当然みたいな。両方とも包含関係があるし、重なり合っている、あるいは違うみたいな部分もあると思うのですが、最後、一言ずつ、「こういうところ近いんじゃないかな」とか「アドバイスできるな」と思った感想を、一人ずつ回して行って、最後、締めにしたいなと思います。

池尻 歴史とサイエンスの違いを少しお話ししておくと、自然科学の意味のサイエンスですが、歴史は方法論は客観的に科学的に構築してきたのですが、非常に歴史家の視点が大事なのです。例えば、1900年代半ばぐらい、いろいろ民衆史というのがすごく流行ったのですが、民衆の観点で、政治家とは違う立場で、歴史を見ていく。なので、資料をどのレンズで見るとかというのが、結構、歴史学の場合は重要で、方法論的なステップアップ、科学的なステップアップとは別に、誰がどこを見るのかで、結構、歴史のトピックは変わります。最近の世代とかだと、ネットワーク的な観点で歴史を見ていくというので、また違う花の色が出てくるみたいなことがあります。

歴史コミュニケーションとサイエンスコミュニケーション、そういう意味では、より歴史の方が、誰がそのコミュニケーションに関わるのかというのが大事で、例えば、若い世代が入るとか、日本史に関して海外のこういう人が入るとか、アカデミックで社会階層の高い人ではなくて貧乏な人が入ってくるとか、その人の立場によって、結構、この歴史コミュニケーションとかの内容が大きく変わるし、面白い議論になるというのが違いの一つかなと僕は思っています。

共通点は、僕は歴史コミュニケーション、いろいろな場に入っているのだから分かりますが、たぶんサイエンスコミュニケーションもそうなのだろうと思うのですけれども、一番、何かが生まれそうな場所だなと思いました。そういう意味では、最前線で何か新しい、よく分からないものが出てきているところで、うまく拾っていろいろなものにつなげていくというパターンなのかなと思うので、ぜひ、CoSTEPのほうからも、こういうのが出てくると面白いかなと個人的には思っています。

司会（宮本） ありがとうございます。

では、賀一さん、どうでしょう。

伊藤 僕は、受験生を基本相手にしているからわかるのですが、文系・理系の違いにやはり受験生は異様にこだわる。学校のコースも違うというのもあるから、歴史コミュニケーションというのは文系で、サイエンスコミュニケーションは理系の系統になってくるから、歴史コミュニケーションって、池尻さんがおっしゃったように、すごく主観の部分も大事になってくるわけで、主観とか信念とかですよ、客観性よりも、という部分というのが出てきてしまう。だから、歴史コミュニケーションのほうは、客観性を非常に重視するように意識していかないといけないという感じ。サイエンスコミュニケーションのほうも、逆にあって、あまり良い例ではないのですけれども、客観的だというのが自然科学だということになってはいるけれども、例えば、それってユングが言っていることでもあるのですけれども、研究室、ラボの中で一つの妄想集団みたいなのがいとも容易く出来上がってしまう。例えば、小保方晴子さん、いらっしゃいましたよね。小保方さんのいたラボの中では、あのSTAP細胞は「ある」のです。だから、世界的な頭脳である笹井先生ですら、そう思い込んでしまった、なんていうようなことになるわけで、主観に支配されてしまうというか、そういう文系的な危険さ、主観部分の危険さというのがあるから、僕は、だから小保方さんの職業って何なのかといったら錬金術師だと思っているんですよ。平成の錬金術師というか、いとも簡単に、非常に高度なサイエンスのラボなのにも関わらず、錬金術になってしまったという。「あそこの空間においては、STAP細胞はありましたから、何か？」みたいな感じになってしまうから、そこの危うさみたいなものというのを、お互いが気にしながらやっていくと、ちょうど良い着地点が見つかるし、もっと文系と理系って、あんまりビチッと分けないでちゃんと交流した方が良いなというふうに、より、小保方さんを見ていて思いました。それは、

司会（宮本） ありがとうございます。

では、最後、岡田さん、まとめていただいてという感じで（笑）。お願いします。

岡田 まとめます。考古学も歴史学も人文社会系でありつつ科学っぽいところもあります。その点からいえば、歴史コミュニケーションに期待される役割は、サイエンスコミュニケーションが

誕生した背景と共通する部分もあると思います。

歴史コミュニケーションにおいて、これから大事だと思われるのは、かつては文字が書ける歴史家が作成した史料がメインだったけれども、これからの SNS 時代、誰もが「歴史家」になり得るというか、記録を残したり、解釈を発信できるようになります。一方、様々な歴史解釈も共有されるようになったときに、誰かを傷つけるような、あるいは発表でご紹介した「矜持を持って語られない、責任を持って語られない歴史」がありうるということも、きちんとマナーとして持っておくべきでしょう。そうしないと、せっかく多様性を認めても、歴史が誰かを傷つけるということが起きてしまうので、そのあたりでやはり歴史コミュニケーションが果たす役割とその中で残る課題というのはあると思います。

